

2012年11月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

東シベリア付近ではブロッキング高気圧が発達し、月平均500 hPa 高度は正偏差となった。一方、中央アジアから日本の東海上にかけては東西に広く負偏差が分布し、中央・東アジアでは低温偏差となった。ジェット気流は中東から日本の東海上にかけて蛇行が小さく、平年の位置に比べて南偏が明瞭だった。また、ユーラシア大陸では寒帯前線ジェット気流が明瞭だった。

熱帯の対流活動は、インド洋東部と西部太平洋赤道域で平年より活発、南シナ海からフィリピン東方海上にかけては不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、月の前半にインド洋東部から太平洋にかけて東進し、その後、不明瞭となった。対流圏下層の赤道域は、インド洋で西風偏差、太平洋で東風偏差だった。対流圏上層は、北インド洋からフィリピン東方海上にかけての高気圧性循環が平年より強かった。南方振動指数は+0.4だった。

世界の天候

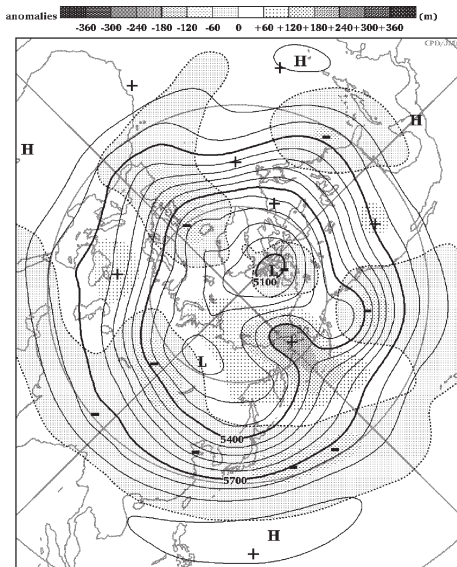
2012年11月の世界の月平均気温偏差は+0.24°Cで、1891年の統計開始以来、2番目に高い値となった。11月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.68°C/100年である。主な異常天候発生地域は次のとおり。

- 北日本からカザフスタン東部の広い範囲で異常多雨となった。
- 黒海から地中海周辺の広い範囲で異常高温となった。
- 米国の東部と中部では異常少雨となった。

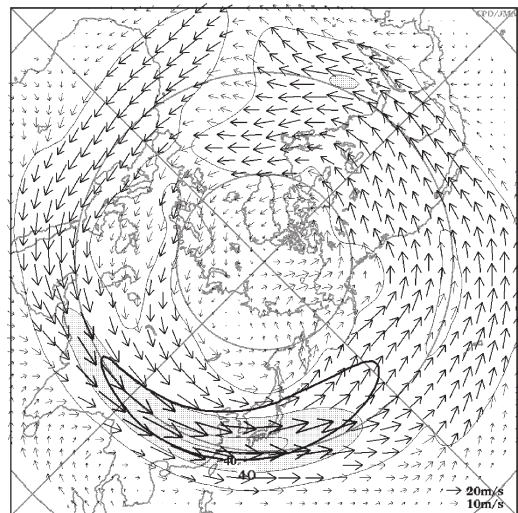
(気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課)

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

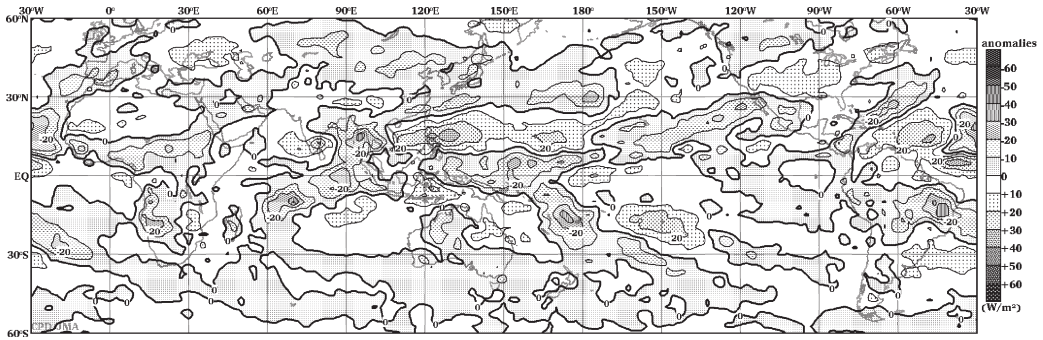
<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



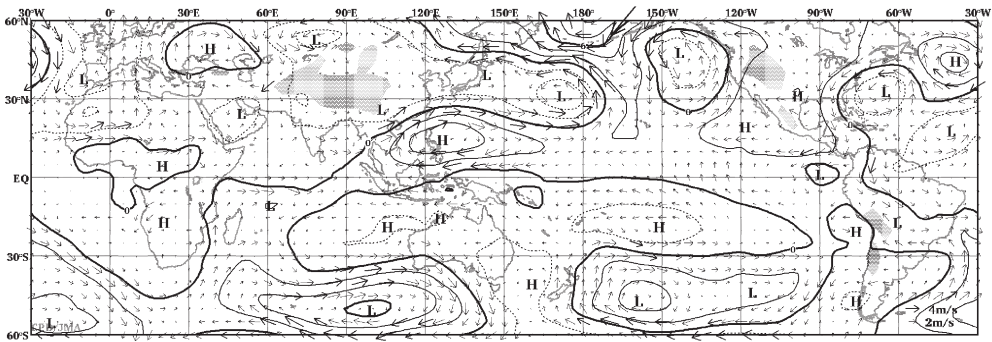
2012年11月の北半球月平均500 hPa 高度および平年偏差
等値線間隔は60 m。陰影は平年偏差。平年値は1981～2010年のデータから作成。



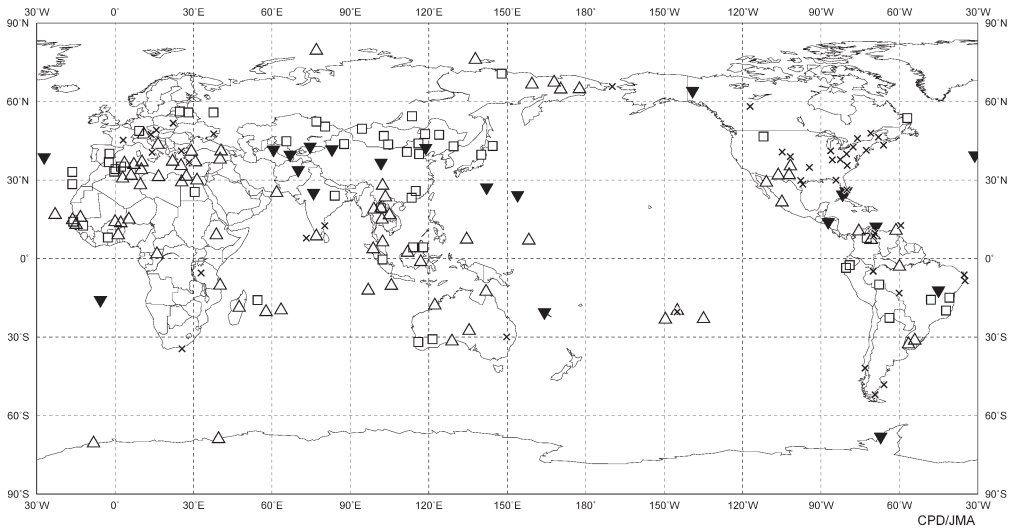
2012年11月の北半球月平均200 hPa 風速および風ベクトル
等値線間隔は20 m/s。陰影部は40 m/s以上。太実線で囲まれた領域は平年の40 m/s以上の領域を示す。平年値は1981～2010年のデータから作成。



2012年11月の月平均外向き長波放射量年偏差
 等値線間隔は10 W/m²で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。元データは NOAA、平年値は1981~2010年のデータから作成。



2012年11月の月平均 850 hPa 流線関数年偏差および風年偏差ベクトル
 流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 、平年値は1981~2010年のデータから作成。



2012年11月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
 異常高温・低温は標準偏差の1.83倍以上、異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0。